

ISSN 2187-0926

Open

Journal of Marketing

2013.3



ビジネスインサイトを捉える直観検証型思考
新しいマーケティング・リサーチの基本的アイデア

Intuition of Essences Getting Business Insight

A basic idea about new marketing research

水越康介

首都大学東京大学院

社会科学研究科

Kosuke Mizukoshi

Tokyo Metropolitan University

Business School

第1節 量的リサーチと質的リサーチに違いはない

本章では、ビジネスインサイトと呼ばれるような確信を捉えるために、直観検証型思考(本質直観)に基づくリサーチのアイデアを提示する。大まかなアイデアは、実にシンプルである。相手をリサーチしても仕方がない。リサーチするべきは、自分自身だ。

これまでのマーケティング・リサーチは、量的リサーチに代表されるように、仮説の正しさをたくさんのサンプルを集めることによって確認しようとしてきた。例えば、今の顧客は性能よりもデザインを重視する傾向があるというのならば、この仮説が正しいかどうかは、1万人でも10万人でも、たくさんの顧客に実際に聞いてみればわかる。聞いてみた結果、大半がそうだといえれば、この仮説はどうやら正しいようだ、ということになる。

もちろん、アンケート項目で1つ2つ聞いたぐらいでは、本当のことはわからないかもしれない。そう考えれば、量的リサーチではなく質的リサーチの出番となる。時間も予算もたくさんあるのならば、同じく1万人でも10万人でも、顧客にみっちり話を聞いたら良い。

マーケティング・リサーチでよく利用される二つの方法、量的リサーチと質的リサーチは、ようするに大きな違いはない。サンプルの数が多いかどうか、それに呼応して、どれだけ多くの話を聞くかについて、程度の差があるだけである。どちらも、相

手に聞けば答えがわかると思っている。

これらの方法自体が間違っているというわけではない。量的リサーチも質的リサーチも、マーケティング・リサーチの基本であり、今では欠かすことのできないマーケティング活動の一つである。だが、我々のみる限り、マーケティング・リサーチはこれしかない、というわけではない。むしろ、もっと根本的に異なる方法がありえるとともに、もっと別の方法の方が、マーケティングとしてやるべき価値が大きいように思われる。

それが、直観検証型思考と呼ばれる思考方法に基づくマーケティング・リサーチである。この思考方法は、後述する通り、本質直観とよばれる考え方を基本にしている。おそらく、近年注目されるビジネスエスノグラフィーや参与観察、あるいはオブザーベーションといった手法の元々の考え方であったと思われる。これらの手法は、いわゆる質的リサーチではない。そうした手法とは、別の観点から違うものだと考えた方がよい。すなわち、相手が答えを持っているとは考えないことにこそ、重要な点がある。

もっといえば、相手が答えを持っているとは考えないということが意味するのは、相手が明確なニーズを持っておらず、ニーズは潜在的なものである、ということでもない。そうであれば、より相手を詳細に調べれば答えがみえてくることになる。参与観察や、あるいはデプスインタビューといった質的リサーチは、往々にして相手をより深く調べようとする。そうして、泥沼に

落ち込んでいくことになるか、適当なところで体よく切り上げて、後は量的リサーチで確かめようということになる。直観検証型思考は、こうした問題には最初から陥らない。なぜならば、根本的に相手が答えを持っているのではなく、それゆえに問われる対象は相手ではなく、自分自身だと考えるからである。

以下では、この直観検証型思考の方法を提示しながら、マーケティング・リサーチのもう一つの方向性を確認しよう。なお、直観検証型思考は、もともと『はじめての哲学史』(竹田青嗣・西研編著、有斐閣、1998)に示されていたアイデアである。大学生用のテキストだが、その示すところは深い。偶然にもこのテキストを読んで、私は自らのうちにある確信を得た。この確信の確からしさを自らのうちに問うたのが本稿ということになる。その限りでは、本稿自体、直観検証型思考に沿っているともいえる。

第2節 直観補強型思考と直観検証型思考

竹田・西編著(1998)による哲学史のテキストでは、冒頭に哲学の思考の特徴が提示されている。当然、この方法だけが哲学の思考であるとはいえないだろうが、しかし、とても重要な区分がなされているように思われる。「直観補強型思考」と「直観検証型思考」である(竹田・西編著 1998、16頁)。

直観補強型思考とは、我々の一般的な思考の方法であり、自分の何かしらの考えや思いについて、その正しさや関連する知識を本や資料を通じて手に入れ、その直観を

より強固にしていく思考法である。これに対して、直観検証型とは、哲学の思考の方法であり、そもそも自分が何かしらの考えや思いを抱いている、抱いてしまったということに対して、どうしてそんなことを考えてしまったのかを考え直し、問い直す思考法であるとされる。

「ある問題について多くの本を読んだり、資料を調べたりすることができる。その多くの努力を人は”自分の思考”であると考える。しかし、それが果たしているのは、じつは自分のはじめの直観を”補強する”ということにすぎない。私はそういう思考を「直観補強型思考」と呼ぶ。・・・「直観補強型思考」に抗って考えるような思考、言いかえれば、自分の直観を補強する思考ではなくて、自分がなぜそのような直観をもつのかを検証し、確かめ直すような思考、「直観検証型思考」なのである(16頁)。」

二つの思考法は、どちらも自分の直観を出発点にするものの、そこから向かう方向が真逆になっている。直観補強型は、自分の外部に出て行くことを通じて、直観の正しさを確認しようとする。逆に、直観検証型は、自分の内部に戻っていくことを通じて、直観の正しさを確認しようとする。

当然、特殊な思考の方法は后者である。それは一般的に行なわれる思考の方法ではなく、むしろ、哲学に固有の方法であると考えられている。だが、我々のみ限り、この方法こそ、哲学に必要とされているというよりは、ビジネスや日常の生活におい

て必要とされているように思われる。直観補強型思考も大事には違いないが、あまりに直観補強型思考が利用されすぎていて、もっと他の大事なことが忘れられているように感じられるからである。

竹田・西による2つの思考法の対比と直観検証型思考を重視する姿勢は、テキストでは後段で紹介されるフッサールの現象学にその多くを負っている。テキストの記述に従えば、フッサールの現象学では、事象の確からしさをいかにして確信するかという問題が考察される。これは、我々の「主観」と、その外側に広がると考えられる「客観」の一致や整合性をどのようにつけるのかという、哲学ではおなじみのテーマだった。当然、ここでは「客観」の獲得こそが、正しさの根拠であったり、真理そのものであると考えられてきた。

「主観」と「客観」の一致は厄介な問題であり、直観補強型思考についても、この問題を克服しよとする方法と見なすことができる。すなわち、主観では怪しいが、その数が外部で集まっていけば、より客観という正しい状態に近づけていくことができるというわけである。

フッサールは、しかし、この一致の問題に対して全く逆のアプローチをとったという。テキストから引用しておこう。

「フッサールはこう考えた。＜認識の客観性や真理性ということ、主観の外側に存在する客観との一致と考える必要はない。たしかにデカルトのいうように主観は客観の外には出られな

いが、それでいっこうにかまわない。『これは真だ、客観性がある』という確信が生じるのは主観の内側のことだからだ＞(221頁)。」

続けて彼らがいうように、これは一見とんでもない考えに見えるが、必ずしもそうではない。むしろ、正しさを得るという点では大事な方法である。というのも、外に向かう思考は、相手には到達のしようがないのだから究極的には失敗せざるを得ないとともに、一方で、我々が何かしらの確信を得ることがあるのは確かであり、それは我々が生きているこの世界での体験に他ならないからである。

フッサール自身は、より具体的に、その方法を大きく2つ提示しているという。現象学的還元と、本質直観(the intuition of essences)である(223頁)。現象学的還元とは、再びテキストに従えば、主観の外に客観的な事物や世界が存在しているかどうか、またそれがいかに在るかについては一切考えないことにすることである。エポケーと呼ばれる判断停止状態を意味する。その上で、本質直観とは、自分の知覚体験に注目し、その体験を反省することによって、その正しさを確かめたり、付け加えたりする。そして、どの主観にも共通する共通本質を探り出していく。ここで、直観検証型思考とは、この本質直観のことを指していたことがわかる¹。

¹ より厳密には、現象学的還元と本質直観の違いは今ひとつはっきりしないようにも見える。例えば竹田(2004)によると、現象学的還元とは、「この

確信成立の条件を問う方法」であるとされ、本文で提示される本質直観と同一視されているようにみえる(竹田 2004、75 頁)。一方で、本質直観(本文では本質観取)については、「われわれが、信念対立を生み出さないような仕方さまざまな問題について共通理解を深めてゆくための思考の原理論である」とされている(88 頁)。この説明に従えば、確信成立の条件を問う方法と、それとは別に対立を生み出さないような仕方である方法があるということになる。

だが、確信成立の条件を問う方法自体が、すなわち、対立という問題に答える方法だといえるようにも感じられる。確信成立の条件を問う中で、おそらく生活世界が見出されることになるからである。逆に、この説明を別々の方法として捉えるのなら、後者は、それは本質直観というよりは、直ちに対話と呼んだほうがいいのではないだろうか。実際、竹田(2004)では、本質直観に続いてハーバーマスの公共圏と真理の合意説が取り上げられており、いっそう本質直観は対話と重ね合わされている。

あるいは、本質直観は、本当に本質的な何かを取り出すという方法として理解されるべきかもしれない。竹田(2004)では、「現象学では日常の言語行為の核といえるもの(本質)を内省によって取り出します。これが言語行為の『本質観取』です(143 頁)。」ともされている。枕につけられた言語行為の意味するところは、いささか複雑だが、この説明に素直に従えば、本質直観では当の本質自体が取り出されてしまうことになる。だが、むしろ我々には、本質直観は当の本質を取り出すという試みではなく、まさに現象学的還元を通じて客観-主観図式を停止し、当の本質に何かを確信し、また自らを分析すべきであるように思われる。

遡れば、竹田(1998)では、フッサールの原著に忠実に、2種類の本質直観が提示されるとともに、一つはさらに知覚直観と本質直観にわけられていた。知覚直観と本質直観は知覚そのものとその意味付けにかかわり、もう一つの意味での本質直観が、本稿の意味に対応している。これらの区分は曖昧であるとされる一方で、正直なところその具体的な意味はとりずらいとしかいいようがない。

結局、本質直観に対する認識のずれは、フッサールの現象学そのものに由来するのかもしれないし、竹田の解釈に由来するのかもしれない。あるいは、引き続き竹田の議論に従えば、我々が現象学というものを独特な形で理解しているからということにつながるのかもしれない。竹田は、今日の多くの現象学理解が誤っていると、その一例

こうして、現象学は独自の方法を獲得することになる。テキストでは現象学の紹介の最後に次のように指摘されている。

「『どこかに真理があるはずで、それはいかんして獲得されるか』というふうに現象学は問わない。そうではなく、真だという「確信」はいかんして成立しているか、と問うのである(223-224 頁)。」

補足していえば、真だという私の確信がいかんして成立しているのかを、私が私に問い直すことを通じて、現象学は考察を進めるということになるだろう。誰か他人の確信を調べるわけでもなければ、その確信の正しさを調べるために、どこからか資料を集める必要は、まずはないわけである。

第3節 独我論ではなく生活世界

現象学の考え方は、しばしば独我論であ

として、メルロ＝ポンティやハイデガーが取り上げている(竹田 2004、14-15 頁、竹田 2012、197-200 頁)。だが、我々の理解は、メルロ＝ポンティの説とされる「生きられている生活世界」に人々を立ち戻らせるという身体論の論理に共感するし、より洗練された方法として、ハイデガーが本質直観を先行させて人間身体を捉えたこと(202 頁)を決定的な重要な方法であったと考える。

こうして竹田を批判的に継承しようとするならば、例えば、彼がいう世界観の共通理解について、それがどうして共通であることが分かるのかもはっきりとしないともいえる(竹田 2004、64 頁)。ハイデガーにしても限界があるとされる生活世界の理解について、やはりフッサールの方法そのままでは問題があるということかもしれない。竹田(2004)には、本質直観については別途考察の書籍を予定しているとある(竹田 2004、88 頁)。さしあたり、我々としては新しい考察を待たばよからう。

るともいわれてきた。確かに、客観や、客観と主観の一致を問題とせず、主観に固執するという方法は、私が思うことだけが真であり、確実なことであるという独我論として構成される。だが、現象学の考えは、それから仮説検証型思考という方法は、根本的な点で独我論とは異なっている。

なによりも、独我論とは、私が思うことが「端的に」真であり、それ以上の議論は一切不要である。現象学はそうではなく、私がそうってしまったということ、何かを確信してしまったということ、この感覚を出発点として、場合によってはそれを疑うという意識のもとで、自らの内側に遡っていくことを求める。出発点としては独我論的だが、独我論はそれで終わりなのに対し、現象学はそこから議論が始まる。竹田は別の著作の中で、これを方法論的独我論と説明している²。

もっといえば、現象学が行き着く果ては、独我論どころか我々が生きるこの世界である。我々は、いうまでもなくこの世界に生きていて、何かしらの日常生活を営んでいる。主観と客観の一致を議論してきたこれまでの哲学の多くは、この「いうまでもなく」を問題とし、我々が本当にこの世界に住んでいるのかどうかを問うてきた。だが、そうではない。我々がこの世界に生きているということ自体が議論の出発点なのであり、その世界の中で、しかし時にある確信が生まれ、あるいは時には疑問が生まれる

ということこそが、問われるべき問題だとみなされる。

竹田では、わかりやすい一つの説明として、リンゴの本質直観がたびたび紹介されている（竹田 2004、74-75 頁）。今、我々の目の前に一つのリンゴが置かれている。そんな状況を想定してみる。このとき、通常理解であれば、目の前にリンゴという物体があるからこそ、我々はそれを視覚を通じて捉え、リンゴの像を頭の中に思い描くことができると考える。だが、この通常理解は、直ちに主客問題を引き起こす。当のリンゴという物体を、我々は間違いなく頭の中に思い描いているのだろうか。どこかでノイズが入っている可能性はないのだろうか。あるいは、間違いなく思い描いているかどうかは、どうやれば確かめられるのだろうか。

この問いには、おそらく明確には答えられない。多くの場合、リンゴを実際に触ってみたり、他人にもそれがリンゴとして見えているかどうかを聞いたりすることで、その確からしさを確認しようとするだろう。これは直観補強型思考の典型的な方法であるが、依然として、それが正しいかどうかはわからない。触ってみても、触った感覚が正しいかどうかの主客問題が現れるだけであるし、他人に聞いても、他人が嘘をついていないかどうかの主客問題が現れるだけである。

本質検証型思考はこれと異なる。大事なことは、なによりも、我々が今ここにリンゴがあると、確かに確信してしまっている

² 竹田(2012)、202-203 頁。

ということである。ここから、どうして我々がそういう確信を抱いているのか、その理由を一つずつ洗い出していくのだ。我々がそれをリンゴだとして確信しているのは、例えばそれが「赤く」、「丸く」、「つやつや」として確信しているからである。これらの確信は、客観的にそれが赤いかどうかという問題ではない。そうではなく、本質検証型思考の過程では、それが客観的かどうかは現象学的還元の名の下に思考停止(エポケー)されている。とにかく自らのうちに確信の理由をたどっていく。

おそらく、赤いという確信、丸いという確信、これらもまた問い直していくことができる。赤いという確信は、それを赤と呼んだ幼い頃の記憶に支えられているかもしれないし、丸いという確信は、柔らかい光と影のあり方について何かしらの確信を有しているからかもしれない。こうしてリンゴを確信している理由が問い直される中で、自分の確信の理由がより明確に理解できるようになる。そしてその理解において、独我論から始めたにもかかわらず、結局この世界に生きているからこそ、その確信が生まれているということを見いだすことができると思われるわけだ。

第4節 若干の課題

しかし、どうして我々は「いうまでもなく」この世界に生きているといえるのか。これこそが問われるべき問題ではないのか。やはりそういいたいくなるかもしれない。正直に言えば、竹田による理解ですら、こ

の点の説明は相当に難解であるようにみえる。

例えば、竹田ではリンゴの本質直観の紹介に続き、それが最終的にどうして「客観的認識」あるいは「妥当な認識」と呼んでいいのかについて、次のように述べられている。

「・・・『リンゴ』がにせものだったり、夢だったりする『可能性』がどこまでも残っている。にもかかわらず、この『確信』が、まず私にとって疑いえないものとなり、さらに、”誰にとっても”動かしがたい『確信』となるなら(より正確には、みんなにとっても動かしがたい確信としてある、という確信=間主観的確信が私に生じれば)、それは『客観的認識』あるいは『妥当な認識』と呼んでよいものとなる(竹田 2012、209頁)。」

ここでは、括弧までつけられて説明されているにもかかわらず、どうして私のうちの確信から、それが他人にとっても動かしがたい確信としてあるといえるようになるのかがよくわからない。問題の所在は、一つには、この疑問はすでに主客問題になっているということである。竹田は、フッサールに依拠しつつ、主観-客観を内在-超越と捉え直しながら説明しているのだが、どうしても最終的にわかりやすさを追求しようとしたとき、主観-客観が登場してしまうということかもしれない。

だが、より重要な問題として、そもそもフッサールが明示的にこの点の解決をなし

えていない可能性がある。竹田自身、フッサールの初期の考察では、主観的確信が「間主観的確信」に至るその条件を解明していないとしている(竹田 2012、210 頁)。その後、フッサールはこの「他我の構成」について議論を進めたのだという。だが、この議論をしても納得できる説明になっているようにはみえない。

「私はこういおう。われわれが現象学的方法の根本原則をよく理解する限り、これはつぎのようなプロセスをとることになる。

まず「他者は一人の實在する人間」であるという確信の構成、つぎに他者が、単に実在的な事物存在ではなく、「人格的存在」として確かに存在するという確信の構成へと進む(竹田 2012、219 頁)。」

実際にはもう少し解説が続くのだが、問題が先送りされているだけで、依然としてどうしてそういう確信の構成ができるのかわからない。おそらくこの最大の理由は、方法論的独我論として起点に採用された自我が残ってしまっており、その外部として他我が想定され、両者の結びつきが議論されているからであろう。ようするに、ここでもやはり主客問題が残っているようにみえるのである。

むしろ、竹田はこの解説の直前で、フッサールが自我に焦点を当て直していることを説明している。重要なのはこちらではないだろうか。

「超越論的な探求においてわれわれは、超越論的『自我』というものを、たしかに、客観としての『世界』に対してこれを構成する自我極という具合に書き出した。しかしこれはある意味で素朴な描き方だった。・・・この「われわれ」という確信、つまり他者たちとの世界、という確信が、どのように構成されるのか、ということが次の問題である(竹田 2012、218-219 頁)。」

文章の前半では、客観の側ではなく、自我の側を問い直そうとしているようにみえる。にもかかわらず、竹田の説明では、後段で、結局主客問題に引き戻されているようにみえる。おそらく、方法論的に選択された独我論としての超越論的「自我」なるものは、それ自体が最初から「われわれ」というものであったことが示されることが重要なのである。そう考えたとき、他者たちとの世界の確信という確信がどのように構成されるのかということは「次の」問題ではなくて、最初に解決されていたことが見いだされることになる。

竹田自身は、この説明に引き続き、ハイデガーによるフッサール批判の再検討へと向かう。だが、ここでは素直に、ハイデガーの理解に従った方がわかりやすい。本質直観に重点を置き、その「問う」という出来事が生じてしまっているということに着眼し、主観と客観という区分をはっきりと無効にしているように見えるからである。

なんであれ、我々が何かを確信したり、何かを問うというとき、問う私と問われる対象とともに、「問う」ということが成立し

ている。もちろん、私がいなければ問いは生まれようがないし、対象がなければやはり問いは生じない。その意味では、「問う」ということは、私が何かを「問う」のでなければならぬが、それは、私と何かが先にある、その上で、「問う」ということが生じているとは限らない。極端に言えば、「問う」ということが先に生じていても良い。そこまでいわないまでも、私と対象と「問う」ということは、同時成立しているとも考えられる。

つまり、何かしら「問う」という出来事が生じているとき、そこには、哲学的によく利用される表現を用いれば、すでにつねに、私と対象としての世界が共に成立してしまっているのである。ここから、私という主観と、世界という客観の一致を問題にすることも可能になる一方で、それはすでに、問題の所在を取り損ねていることになる。そうではなく、繰り返していえば、何かしら問うてしまったり気づいてしまったその瞬間において、我々はいうまでもなくこの世界に生きてしまっていることが成立してしまっている。後は、この問うてしまったということの確信を、自らに遡って確認していけばいい。その先には、我々が生きる世界の多様な可能性を意識的に見出せる。

フッサールの現象学に近い議論や発展した議論として、ニーチェやハイデガーの哲学がよく登場することは知られている³。こ

³ 特に 20 世紀最大の哲学者ともいわれるハイデ

の二人は、考えるという言葉の主語に「私」を使わない。「私が考える(Ich denkt)」ではなく「それは考える(Es denkt)」といわれる⁴。あるいは、「それは与える(Es gibt)」、「それを与える(gibt Es)」⁵。最初にあるのは、考えるということ、問うということであり、それは当然何かについて考えたり、問うたりしているはずであり、当然誰かが考えたり、問うたりしているはずである。こうして、問うたり考えたりすることは、必然的に私と対象を伴うのである。どうして?という問いが生まれるとき、問いの答を具体的に考える前に、すでに何かしらの答えが与えられることが約束されているのである。

第 5 節 「客観性」を確保する

現象学が独我論ではなく、生活世界を見出すことになるのならば、その地点において、現象学や直観検証型思考は、新しい意味での「客観性」を確保することができる。それは、一般的な直観補強型思考が目指した客観性とは、少し形が異なっているし、

ガーは、現象学をテコにして全く新しい存在論的哲学を切り開いた。その試みは、旧来の哲学が「問う」ということを前提にしてきたのに対して、そもそも何か問われるということの問題、すなわち存在そのものについて考察することの重要性を指摘したのであった。

⁴ ニーチェ(1986)、34 頁。Es を素直に「それ」と訳すべきか、フロイト流のエスと理解すべきかは議論があるようだ。主体を解体するという意味では、どちらでも良いようには感じる。詳しくは互(2010)を参照のこと。

⁵ ハイデガー(1960)、442 頁、ハイデガー(1997)、66 頁)。互(2010)、216-217 頁。

間主観性のようなものとも違いそうだ。直観補強型思考は、ある直観の確からしさについて、端的には他人も又そう思っているかどうかを外に向かって探っていくことになる。そこで得られる多くの答えは、正しいかもしれないが正しくないかもしれない。結局のところ、他人のその主張が正しいかどうか、それ自体が無限に問われることになるからである。一方で、直観検証型思考では、そうってしまった根拠が自らの内に向かって探られることになる。その根拠もまた無限に問うことができるが、その無限性は、客観に至れるかどうかという直観補強型思考のようなナンセンスではない。

例えば、信号機の前に立ち、右に行くべきか左に行くべきかを考えているとしよう。この時、例えばあなたは右に行くことを判断したとする。直観補強型であれば、この右に行くという判断の正しさを確認するため、他の人もまた右に行くと判断しているかどうかを調べることになる。アンケートでもとればすぐにわかる。だが、だからといって、右に行くことが正しいかどうかは依然としてわからない。多くの人が右に行くといっているだけであるし、本当に行くかどうかもわからない。みんなであなを騙そうとしているのかもしれないからである。

直観検証型の場合はどうなるか。問われるべきは自分の判断である。どうして、あなたは右に行こうと考えたのか。道路が右側の方が整備されていたからかもしれない。あなたが右利きだったからかもしれない。

左側は上り坂になっていて、ちょっと大変そうだったからかもしれない。自分の判断の理由を遡って考え直してみること、その中で、自分の判断が正しいかどうかを改めて問い直すことができる。

さらに、この問い直しは、独我の孤独な作業ではない。道路が整備されている方が良さだろうという判断は、整備された道を歩いた過去の記憶と結びついているであろうし、整備されているということ(これ自体、あなたが整備したのではなく、誰かこの世界の他人が整備してくれたものであるはずだ)に対して正しさを感じるからであろう。つまり、直観検証型思考において呼び起こされるのは、なんのことはない、我々がこの世界に生き、日常的に当たり前だと信じている事柄なのである。

ちなみに、この例え話のままだと、そもそも右に行くか左に行くかという判断の迷いこそが問題なのだと思われるかもしれない。やり方は変わらない。今度は、信号機を前にして悩んでいるということ、その悩んでいることの確からしさを、直観検証型思考を用いて考えればいいのである。

自らの思考を問い直すということは、結局、そのために別途資料を集めなくてはならなくなるかもしれない。それは自分に関わる資料であるかもしれないし、そうではなく、むしろ通常の書籍かもしれない。その意味において、直観検証型思考といえども、外部の知識が一切不要だというわけではない。ただ、少なくとも、求める答えは外側にはない。それは本当の意味で手がか

りにすぎない。本当の答えはつねにすでに、最初に与えられてしまっているのである。

第6節 最初の確信を否定してもいい

以上、本章では直観検証型思考の重要性について確認してきた。この思考方法は、何よりも最初に自身が何かしらの確信を得ることから出発する。その最初の確信は、自分にとって疑いえないものであるには違いないが、実際の思考としては、問い直しの中で確信そのものが否定されることになるかもしれない。

詳しくは今後考えていこうと思うが、元々フッサールの現象学では、こうした最初の確信が否定されるという可能性はあまり念頭に置かれていないようにもみえる。自身の最初の確信自体が怪しかったということになると、それは客観の問題と同じで怪しさを無限に問えるということになるからである。だから、元々の現象学では、真理の明証性とよばれる強い確信が、最初に与えられることになる。その上で、直観検証型思考を通じてこの確信がより鍛え上げられ、最も過不足ない形で確信が得られるようになったとき、生活世界との一致が見られると考えたわけである。

おそらく、この論理のままでは問題がある。最初の確信がどちらにせよ最終的には正しいということになると、それはようすに結果的に独我論と同じだったということになりかねないからである⁶。この問題を

回避するためには、さしあたり、直観検証型思考が常に最初の確信を肯定することになると考えるのではなく、時には否定することになるということを含み込んでおく必要がある。

この論理をしっかりと考えるためには、もう少し哲学的な議論を押し進めなければならぬ。だが、少なくともマーケティング・リサーチという点に関していえば、さしあたりそうした徹底は不要だろう⁷。まずは自身の確信が出発点になるということ、それから、その確信の確からしさを再確認するにあたっては、外から情報を集めるのではなく、自らの内に遡った方が確実であるということだけを了解しておこう。

参考文献

- 東浩紀(1998)『存在論的、郵便的』新潮社。
 互盛央(2010)『エスの系譜』講談社。
 竹田青嗣(1998)『はじめての現象学』海鳥社。
 竹田青嗣(2004)『現象学は<思考の原理>である』ちくま新書。
 竹田青嗣(2012)『超読解! はじめてのフッサール 「現象学の理念」』講談社現代新書。
 竹田青嗣・西研編著(1998)『はじめての哲学史』有斐閣。
 ニーチェ・F.(1987)『善悪の彼岸』岩波文庫。

起源』の考察が参考になる。

⁷ 改めてビジネス・インサイトの考察の際に、この問題を検討することにしたい。

⁶ この点については、東(1998)による『幾何学の

ビジネスインサイトを捉える直観検証型思考

水越康介

ハイデガー・M.(1960)『存在と時間(上)』
岩波文庫。

ハイデガー・M.(1997)『「ヒューマニズム」
について』ちくま学芸文庫。

Open Journal of Marketing, 2013.3

ビジネスインサイを捉える直観検証型思考

新しいマーケティング・リサーチの基本的アイデア

水越康介 首都大学東京社会科学研究科

ISSN 2187-0926

発行：私的市場戦略研究室

代表：水越康介

〒192-0397

東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻

<http://mizkos.jp> letter@mizkos.jp